
スライド、スリップ、スロープ。

吾妻栄子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スライド、スリップ、スロープ。

【Nコード】

N9745Y

【作者名】

吾妻栄子

【あらすじ】

故マイケル・ジャクソンとそのお兄さんのマーロンにヒントを得たお話です。

* 他サイトで投稿した作品です。

公園で

「やっぱり怖いよ」

初めてやってきた公園の滑り台の上で、

マーロンは大きな目いっぱい涙を浮かべて

マイケルの腕にしがみついた。

お揃いのミッキーマウスの笑うTシャツに半ズボンを履いた二人は、小さくて痩せつぼちの体型はもちろん、

アフリカ系アメリカ人特有のチョコレート色の肌といい、

ウェーブした黒い髪といい、クリクリした大きな目といい、分身の
様によく似ていた。

「あはは、見ろよ、怖気づいてるぜ」

下の砂場から少し大きな子供たちが囃し立てた。

「怖いなら、さっさと降りてうちに帰れよ」

「ここは俺らの基地なんだからな」

どうやら自分たちの遊ぶ公園に新参加者が来たこと自体が気に入らないらしい。

公園で

「ここで引いちゃダメだ！」

マイケルは厳しい顔つきで、涙目のマーロンに耳打ちする。

「でも…」

マーロンは再び眼下を確かめる。

春の空はまだ青というより淡い水色だ。

しかし、強まる日差しを浴びた銀色の滑り台の坂は、まるで父親の引き出しに仕舞われたナイフの刃の様に鋭く光っている。

つい二日前、父親の留守にこっそりそのナイフを取り出して眺めていたのが見つかって、二人ともベルトで尻を叩かれた。

「このチビどもめ！」

常日頃はこの幼い双子が母親とお休みのキスを交わす時でさえ目もくれない父親だが、ベルトで叩く時だけは二人を固く捉えて放さない。

「腹から出てきたとたん、二人分食い扶持を増やしたかと思えば、揃って悪さばかりしやる！」

熱した銅さながら赤黒い父親の顔と焼け付く様な痛みを思い出して、

マローンは尻から背筋に震えが駆け上がるのを感じた。

公園で

「これくらい、どうってことないさ」

マイケルは肉薄の小さな肩をちよつと竦めると、こちらもクリツとした円らな目を細めて笑った。

「僕が先に滑って見せるよ」

言うが早いか、マイケルはTシャツの背を見せて屈み込む。

シャツと画用紙をナイフで勢い良く裂くのに似た音がマーロンの耳内を走った。

「ほら！」

砂場に着地したマイケルは、両手を真っ直ぐ空に揚げてマーロンを振り返った。

「やってみれば、何てことないだろ！」

ツヤツヤしたチヨコレート色の顔をしたマイケルと真っ黒な影法師が乾いた真っ白な砂の上をピョンピョンはねる。

「お前、すべんのうまいな」

先ほど囃し立てていた子供たちが次々その周りに集まってきた。人の垣根を飛び越す様に、マイケルは跳ね上がって手を振った。

「マローン、次は、君の番だよ！」

プールで

「やっぱりやめようよ」

ウォーターライダーの入口で、

真新しいオレンジ色の海パンを履いたマーロンは泣き声を出した。

底に水を流した滑り台は遥か眼下に広がる水色のプールまで

うねりを描いて続いており、

まるでとぐろを巻いた巨大な青い蛇の様に見えた。

タベホテルの部屋のテレビで見たのは巨大な毒蛇の映画だった、
とマーロンは思い出す。

そいつは普段は水の奥深くに隠れていて、
急に姿を現してはとぐろで人を絞め殺すのだ。

「死んじゃうよお」

浮き輪を被せてくれた係員たちが

笑いをこらえているのが分かったが、怖いものは怖い。

プールで

「こんなので死ぬわけないだろ」

マイケルは笑いながら、白いドーナツ型の浮き輪が腰の下からずり落ちないように手で固定している。

マーロンも釣り込まれて自分の浮き輪を押さえた。

遊園地のプールが貸し出す浮き輪は、二人のか細い腰には大きすぎた。

僕ら二人とも、まるでシュガードーナッツを付けたスティックチョコレートみたいだ。

マーロンは自分とお揃いのオレンジの海パンを履いたマイケルを眺めて思う。

毒蛇が見たら、いいエサだと思うだろうな。

そう思うと、マーロンの肌は克蘭チチョコの様に栗立った。

「せっかく、夏休みで大きな滑り台のあるプールに連れて来てもらったのに」

マイケルはそう呟くと下に向かって勢い良く手を振った。そこで初めて、母親がいるのは階下のその方角だとマーロンは気付いた。

誰に会いたい時でも、何が欲しい時でも、

マイケルの方が必ず自分より先に見つけるのだ。

「行かないなら、僕が先に飛び込むよ」

マーロンが応える前に、巨大なシュガードーナッツに挟まれた
マイケルの姿は青いとぐるの向こうに飲み込まれた。

派手に水飛沫が上がったかと思うと、マイケルが再び姿を現した。

「脱出成功！」

チョコレート色の顔いっぱい笑顔を浮かべて浮き輪を放つと、
マイケルはアニメに出てくる宇宙船のキャプテンの口調で叫んだ。

「こちらは無事だ、マーロン大尉、至急、救命ボートにて脱出せよ
！」

スキー場で

「こんなの無理だよお」

白銀のスロープを見下ろして、

マーロンはストックを握ったまま凍り付いた。

母親が買い揃えてくれた真っ赤なスキーウェアは

ロッジの中では毛布を体に縛り付けた様に暑苦しく感じた。

しかし、ゲレンデに出てみると、

刺す様な冷気をそこかしこから忍び込ませてくる。

「クラスにも、スキーで脚を折っちゃった子がいるんだ」

改めて言葉にすると、自分もそうなる危険性が一段と高まった様に思えた。

「新聞にも、木に激突して死んだ人のニュースとか良く載るじゃないか」

滑る先には九十九パーセント以上の確率で大きな木が立っており、避けて通れる可能性は一パーセントに満たない気がしてきた。

スキー場で

「どうして君はそんなに怖がりなのかなあ」

ゴーグルで目を隠したマイケルは口元に何だか諦めた様な笑いを浮かべている。

「もう行くよ！」

言うが早いか、シャツと雪の飛沫が小さく上がった。

こちらに向けたマイケルのウェアの背中中、大きな「M」のアップリケが光る。

これは、雪で見通しが悪くなっても互いにすぐ見つけられるようにと、

母親がわざわざ蛍光の切れで二人のウェアに縫い付けたのである。

「あ、おい！」

マーションは立ち止まったまま、たちまち雪景色の中に小さくなっていく「M」の字に手を伸ばした。

今回ばかりは、というより今度こそは、

本当に危険な何かが行く手に待ち構えている気がした。

まるで申し合わせた様に、ストックを握るマーションの手袋の上に、雪の一片が舞い降りてきた。

見上げると、一片、また一片と灰色の空から
無数の白い欠片が群れを成して落ちてくる。

「待てよ！」

マーロンは叫ぶ。

遠ざかる「M」の字は、勢いを増す雪の中で輪郭を失い、
指先に残像だけが纏わりついた。

「置いてかないでくれよ、マイケル！」

強まる吹雪の向こうから、弾けた笑い声が響いてきた。

「先に行って、待ってるよ」

飛行機で

「ご搭乗の皆様にお知らせいたします」

機内アナウンスの事務的な声で、マーロンは目を覚ました。

「当機は只今、地上より三万フィートの高さを飛行しております」

スピーカーを通す過程でどこかがざらついてしまった声が続く。

いつの間にか、寝入っちまってたか。

マーロンは寝違えて微妙に痛くなった首筋に手を当てる。

昨晩は一睡もしてなかったから、当然といえば当然だが。

伸び上がるついでに、歩いてきた女性アテンダントに手を上げる。

「お冷ください」

本当は一杯やりたいのだがと思いつつ、付け加える。

「炭酸入りで」

明日の昼前と夕方にも面接があるから、飲むわけにはいかないのだ。

再来月の誕生日には、バービーの家を買ってやるとあの子たち二人に約束したし、

来月の半ばには失業手当が切れる。

それまでには何としても仕事を見つけないと、俺たちがアパートを
追い出されちまう。

飛行機で

「どうぞ」

泡立つ水と型通りのスマイルを置き土産に
女性アテンダントは立ち去っていく。

確か娘たちが持つてるバービーの衣装にも、
あんなアテンダント風のがあった。

口角だけキュッと上げた他人行儀な笑い方も、
何だかアテンダントとバービーで似ている。

というより、人形の方がその種の取り澄ました顔つきを真似たんだ
ろうな。

マーロンは座席に凭れたまま一口含むと、胸ポケットから写真を取
り出した。

折り目や指跡で微妙に歪み、端の磨り減った写真の中で笑う、幼い
黒人の双子。

これは、確か二年生の時のクリスマス休暇で
サム伯父さんの家に行ったときに撮ったやつだ。

二人とも同じよそ行きの蝶ネクタイをして写ってるけど、
よく見ると鼻がちよっと赤い方が俺だ。

写真を撮る前に、台所のパイを盗み食いしたと疑われて親父に拳骨
をもらった。

本当は伯父さんとの猫が食べたのに、俺ら二人の仕業と決め付けられたのだ。

俺はベソをかいたが、その頃のマイケルは叩かれても決して泣かなくなっていたので、綺麗な笑顔で写ってる。

白い歯を覗かせて、大きな目を楽しげに細めた、笑顔そのものの笑顔でだ。

新築したばかりのオフィスで倒れた時も、あいつのスーツの胸ポケットにはこの写真が入っていたらしい。

飛行機で

「マイケル……」

マーロンは呟いた。

何で、死んじゃったんだよ。

どうして、そんなことまで俺より先じゃなきゃいけなかったんだよ。

俺よりずっと成功していたのに。

ずっと世間から必要とされていたのに。

ずっと、他人からも愛されていたのに。

たとえ俺が今くたばったところで、きっと葬式には、
昨日の一割も人は集まらないだろう。

舌の上でちよつと痛いほど弾けた炭酸水は、
飲み干すとしよっぱい味が残った。

手に持った写真の中で、瓜二つの蝶ネクタイを締めた
二人の笑顔が揺れる。

最初は小刻みに、次第に二つの輪郭がぶれて
幾重にも見えるほど激しく。

「おい、大丈夫かよ？」

「やばいんじゃないか？」

マーロンの四方から哀れみというより危惧の声が次々上がった。

俺のことなんか、ほっといてくれよ。

飛行機で

「ご搭乗の皆様にご知らせいたします！」

抑えている様で、その実かなり上擦ったアナウンスが響き渡った。

ありゃ、どうも、おかしいぞ？

マーロンは思わず顔を上げて辺りを見回す。

何だって、みんな、さっきのアテンダントの女まで、
ジェットコースターに初めて乗ったガキみたいな顔してやがるんだ？

「当機はただ今より、緊急着陸態勢に入ります」

周囲のざわめきと機体の揺れが連動する様に大きくなる。

マーロンは思わず写真ごと胸に両手を当てた。

どうなってんだよ？

「係員が誘導いたしますので、緊急脱出口のスライドから、速やかに避難して下さい」

マーロンは寝入る前に座席のモニターで夢うつつに目にした映像を
急速に思い出した。

それは、飛行機からだだっ広い滑り台が出てきて、
そこから顔のないたくさんの人影が滑り降りていくものだった。

「ちよっ…」

この飛行機専用の滑り台から降りろっての？

三万フィートの高さから？

一体、どこに向かって滑るんだ？

それで、今まで助かった奴って本当にいるの？

体の芯から力が抜け、全身から血が引いていく。

飛行機で

「非常口はこちらです！」

「皆様、落ち着いて行動してください！」

人の波の中から、アテンダントの叫びが切れ切れに聞こえてくる。

「お子様連れの方は手を離さないで下さい！」

幼い子供特有の甲高い泣き声がどこからか飛んできて、

マーロンの耳を突き刺した。

「パパ、早く帰ってきてね。」

「マイク叔父さんにさよならだけしたら、すぐ戻ってきて。」

出掛けに纏わりついてきた双子の娘たちの、チョコレート色の、小さな掌。

「あたしたち、二人ともいい子にして待ってるから。」

無心に自分を見上げていた、黒ダイヤの様に輝く、四個の瞳。

いつだって、グズで、臆病で、失敗ばかりしてきた俺。

それでも、ここで意気地をなくして死ぬわけにはいかないんだ。

マーロンはゆっくり深呼吸すると、

思い切り握り締めたためにますます形の崩れた写真を
胸ポケットに収めた。

大丈夫だよ、マイケル。

今度の滑り台は、俺一人でもちゃんと滑るから。
(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9745y/>

スライド、スリップ、スロープ。

2011年11月29日12時47分発行